

北海道大学医学研究科 神経病態学講座 神経内科学分野 — 創設から未来へ —

北大に神経内科が正式に診療科として独立したのは昭和 62 年(1987 年) 5 月、そして、医学部講座に昇格したのは平成 7 年(1995 年)である。北大神経内科は平成 19 年(2007)に創設20周年を迎えたのである。

歴史的にみると、北大の広義での“神経学の源流”は、諏訪 望北大精神医学講座教授まで遡ることとなる。諏訪教授は“近代神経科学の創始者”とされる米国ハーバード大学スタンレイ・コブ教授のもとに留学されておられる。その諏訪先生のもとで助教授を務めておられた都留美都雄先生が、脳神経外科を開設され、そして、神経内科はこの脳神経外科を母体として誕生した。他大学の神経内科の殆どが内科から分離独立したのと比較して、北大の“臨床神経学”は、精神科から脳神経外科、そして神経内科へと、関連領域を母体として発展してきたものであり、欧米と同じ土壌を共有していると云えよう。

北大医学部に脳神経外科が独立したのは昭和 40 年 4 月で、この昭和 39 年から 40 年にかけては九州大学、次いで東京大学、新潟大学に神経内科が独立した時期にあたる。当時は、欧米に倣い、臨床神経学を担う専門分野を神経内科として独立させる動きが盛んになってきた時期である。脳神経外科を創設された都留教授は米国に 5 年半にわたり留学、日本人で初めて米国脳神経外科専門医の資格を取得されたばかりでなく、その内の 1 年間をボストン市立病院神経内科デニー・ブラウン教授、ジョセフ・フォーレイ准教授のもとで神経学、神経病理学を修められた。この経歴からも伺われるように、脳神経外科学のみならず、神経学全体に造詣が深く、その評価の例としては、日本神経学会において理事や学術総会会長を歴任されたことを挙げれば足りるであろう。

北大神経内科の独立は、一門の努力はもとより、医学部や病院の教職員の支持と応援によるものであった。さらに特筆すべきこととして、神経内科は脳神経外科学講座の中で育まれて、その庇護のもと発展してきた。全国的にみても、脳神経外科から分家独立した神経内科は、北大が唯一であり、他大学の神経内科設立の経緯と比較して、特異な経過を辿っている。

神経内科の初代教授は田代邦雄 現名誉教授である。田代先生は昭和 39 年に北大医学部を卒業後、横須賀米国海軍病院で 1 年間のインターンを修めて、神経内科を目指すべく母校北大医学部に昭和 40 年 4 月に独立したばかりの脳神経外科に入局された。都留教授の助言に従って 2 年間の臨床研修の後に、米国クリーブランド市のウエスタンリザーブ大学(現ケース・ウエスタンリザーブ大学)神経内科ジョセフ・フォーレイ教授のもとに昭和 42 年 7 月に留学された。ここで、神経内科レジデント 3 年間、ついでセントルイス市のセントルイス大学神経病理ジェームス・ネルソン准教授のもとで、神経内科の基本である神経病理レジデントを

2年間、計5年間の在米生活の後に昭和47年8月に帰国された。翌年の昭和48年2月に脳神経外科講師となり、神経内科診療班を結成して神経内科疾患の診療を開始、脳神経外科の講義枠の中で、神経学の学生講義を担当した。蛇足ではあるが、当時の画像診断はX線CTの開発の目処がたった程度であったので、論理的な局在診断と、今は廃止されたが患者を交えての臨床講義で実演された流麗な診察テクニックが学生を大いに魅了したようである。

脳神経外科の医局において“神経内科診療班”は一室を神経内科専用の研究区画とし、その“四研(脳神経外科第4研究室)”と言えば神経内科の拠点、そして筋組織化学診断部門の代名詞となった。神経内科診療班としての外来診療は脳神経外科が手術日で外来診療をしない水曜日と金曜日を外来日とした。この年に、後に初代同門会会長を務めた濱田毅先生が助手(脳神経外科より借用)に採用され神経内科配属となった。神経内科診療班は脳神経外科から講師(田代)と助手(濱田)の2つの有給ポストを提供されることにより、その活動の基盤を保証されたと云えよう。これを契機に、北大内外から神経内科を学ぶ仲間が次々と集まり始め、濱田助手が退職の後、昭和56年10月より森若文雄助手の発令があり、昭和57年11月には北祐会神経内科病院(濱田毅院長)が開院した。これに昭和48年4月より神経疾患の診療を開始した国立療養所札幌南病院(松本昭久医長)を加えて神経内科連携施設が二つとなり、神経疾患の外来から、入院、療養まで対応できる体制が整い始めた。昭和57年10月には神経内科専攻の教室員から初めての海外留学として、森若文雄助手がカリフォルニア州ロスアンゼルのUSC Neuromuscular Centerに留学した(昭和60年3月帰国)。

昭和59年3月には都留教授が退官されたが、同年5月末には都留名誉教授を会長として第25回日本神経学会総会が札幌にて開催された。神経内科を中心とする日本神経学会総会で脳神経外科の都留美都雄先生が会長を務められた。会場は教育文化会館および厚生年金会館、会長講演は「脊髄、脊椎疾患の診断と治療における最近の進歩」と題するものであった。この総会を主催されたことは、都留先生の神経学(神経内科学)に対する多大な貢献、そして日本神経学会理事を歴任された実績が評価されたことによるものである。さらに、この総会は北海道における神経内科の発展・啓蒙に多大の影響を与えた総会としても特筆すべき出来事であった。

都留教授の後を継いだ北大脳神経外科二代目阿部弘教授からも、その後の神経内科設立のために多大なご尽力を頂くことになり、また阿部教授も日本神経学会理事を歴任された。昭和59年11月、田代先生は脳神経外科助教授に発令された。当時、助教授は文部大臣発令であったので、これにより神経内科開設への展望が開けた。昭和62年5月21日医学部附属病院に正式な診療科として神経内科が開設された。それに至るまでに、脳神経外科・神経内科診療班としスタートしてから14年の月日が経っていた。昭和62年7月16日付けで、田代先生が神経内科初代教授に発令され、同年8月26日、神経内科創設および授就任を祝う会が、ホテルニューオータニ札幌で開催された。

神経内科病棟は脳神経外科病棟内の 12 床を稼働し、神経内科外来は同年 9 月 1 日に独立した。診療科の開設にともない、新たに医局を旧医学部附属病院南病棟 3 階の西端にある形成外科医局跡に開設した。北大神経内科は道内の三医育大学で最初に正式に独立した神経内科であり、その開設と同時に、道内各地から患者が殺到した。外来は夕方になっても終わらない日々が続いた。道民と医療関係者からの期待の大きさを物語る一例である。診療科としての独立の喜びは、「北海道大学神経内科－開設までの歩み」(昭和 63 年 3 月刊行)、「北大脳神経外科同門会誌 第 4 号 神経内科創設・田代教授就任記念特集号」(昭和 63 年 7 月刊行)に詳しく掲載されているので、是非ご参照頂きたい。そして、平成元年 10 月には、森若・脳神経外科助手が神経内科助教授に昇任した。

以上は神経内科設立の経緯であり、やや詳しく述べさせていただいた。その後、平成 6 年に附属病院新棟完成にともない、神経内科は 20 床に増床され、専門の看護体制もしかれた。平成 7 年 4 月に医学部神経内科学講座に昇格し、助手 1 名の定員増により、菊地誠志神経内科助手の採用があった。平成 7 年 4 月 7 日には北大医学部神経内科同門会設立総会が開催されて、北祐会神経内科病院 濱田 毅院長が初代会長に就任した。同年、4 月 22 日にはセンチュリーロイヤルホテルにおいて、神経内科学講座開設祝賀会が開催された。祝賀会の模様と一同の喜びは、「北海道大学神経内科の歩み－その誕生から診療科、講座そして大学院研究科まで」(1999 年 12 月刊行)に詳しい。

平成 8 年 4 月、定員増あり、佐々木秀直講師の採用、これで神経内科の医学部付き有給ポストは 4 (教授 1、助教授 1、講師 1、助手 1)となった。平成 10 年に大学院化に伴い大学院医学研究科神経病態学講座神経内科学分野と名称を変更。平成 10 年 6 月、附属病院管理棟の改修に伴い、医局は旧南病棟から管理棟二階に移転した。これにより、初めて研究室も本格的に整備され、診療のみならず教育や研究の基盤を得たといえよう。その成果は教室で主催した学会活動に反映されている。代表的なものとしては、平成 11 年 2 月には第 11 回日本神経免疫学会学術集会(東京)、平成 12 年 3 月には第 35 回脳のシンポジウム(北大学術交流会館)、同年 6 月には第 18 回日本神経治療学会総会(北大学術交流会館)、平成 14 年 5 月には第 43 回日本神経学会総会(ロイトン札幌)の主催などが挙げられる。会長講演である「時、場所、人と神経学」は、それまでの北大神経内科の経緯と発展を全国に紹介する内容であった。北大からは神経内科のみならず、脳神経外科、放射線科のスタッフが教育講演やシンポジウムの講師として活躍した。

このように教室は順調に発展してきたのであるが、平成 14 年 10 月には長らく教室運営の中心的役割を担ってこられた森若助教授が札幌南病院へ転出し、佐々木講師が助教授へ、菊地助手が講師へ昇任し、新たに緒方昭彦助手の採用となった。平成 15 年 3 月には田代教授の最終講義があり、退官記念祝賀会が 3 月 22 日に札幌ニューオータニにおいて盛大に開催された。退官後、田代教授は北大名誉教授としての称号を付与され、北海道医療大学教授として赴任された。また、同年 4 月 1 日より菊地講師が助教授に昇任した。

平成 15 年 7 月 16 日、二代目として佐々木秀直教授が発令され、教室の運営を引き継ぐことになった。8 月 2 日、京王プラザホテルにて就任祝賀会が開催された。同年 10 月 1 日、緒方助手の講師への昇任、矢部一郎助手の新規採用があった。平成 16 年 2 月 24 日、労働科学研究「こころの健康科学研究発表会」を医学部臨床大講堂で開催した(世話人 田代邦雄)。平成 17 年 10 月 1 日緒方講師の退職に伴い、矢部助手が講師に昇任し、新たに辻幸子(現 秋本)が助手に採用された。この間、大学教員の 5%定数削減計画に伴い、神経内科の医学研究科付き有給ポストは他の診療科と同じく 3 ポスト(教授 1、助教授 1、助手 1)となり、病院に神経内科付き助教ポスト 1 が調整により配置されることになった。平成 18 年 9 月に菊地助教授が国立病院機構札幌南病院に転出したことにもない、この配置が確定した。同年、カナダの McGill University Medical School に留学していた新野正明が帰国し、10 月 1 日より助手に採用された。同年 18 年 11 月 1 日、矢部講師は助教授に昇任した。この頃、大学教員の名称変更があり、助教授は准教授、助手は助教と称されることになった。平成 19 年 9 月 23 日には、ヒルトン小樽にて、教室と同門会の共催により“神経内科創設 20 周年記念祝賀会”が開催された。田代名誉教授からは「北大神経内科は如何にして誕生したか」、来賓として参加頂いた日本神経学会理事長である葛原茂樹先生からは「私と neurology」と題して、記念講演を頂いた。

平成 21 年 4 月に医局は病院管理棟二階から医学研究科中研究棟一階東側に移転した。神経内科も平成 15 年よりの大学の独立行政法人化、卒後臨床研修の義務化、名義貸し問題など、幾つかの荒波に翻弄された。そのような環境ではあるが、教室員には新人が加わっている。神経内科学教室の扉には、以前と同じく、講座昇格を記念して作成した、当時の金色に輝く表札が今も掲げられている。田代名誉教授は北海道医療大学教授を退職された後は、北祐会神経内科病院顧問として診療と若手の教育に尽くされている。森若前助教授は北海道医療大学教授としてコメディカルの教育と大学運営に携わる傍ら、二代目同門会長に就任していただいた。菊地・前助教授は札幌市内の二つの国立病院(札幌南病院と西札幌病院)が統合されて新たに発足した北海道医療センターの副院長として、機構整備に活躍している。共に、教室の運営に側面から御支援頂いている。

以上が、学内からみた神経内科の創設前夜から現在までのあらましである。北大医学部脳神経外科のなかに神経内科が活動を開始したのが 1973 年とすれば、2009 年は数えて 37 年目に当たる。その間、教室とその出身者は北海道庁や北海道難病連が主催する医療相談や難病検診業務の大部分を担ってきたといっても過言ではない。神経疾患を診療するために道内医療機関に神経内科を開設してきた。幾多の施設の中で現在も機能している施設を列挙してみると、教室出身者が昭和 48 年 4 月には国立療養所札幌南病院にて神経疾患の診療を開始、昭和 57 年 11 月には北祐会神経内科病院が開院した。その後は、昭和 58 年 4 月に釧路労災病院、平成元年 5 月には市立函館病院、平成 4 年 7 月には市立札幌病院、平成 4 年 11 月には伊達赤十字病院、平成 7 年 4 月には苫小牧市立病院、平成 8 年 4 月には帯広

厚生病院、平成 11 年 4 月には旭川赤十字病院の順で神経内科が開設された。この他に美唄労災病院や国立函館病院へも一時、教室から赴任したが、その後の医療環境の変化や施設の運営方針の変遷などにより、退職者の補充を断念した。また、北見赤十字病院や稚内市立病院には非常勤で定期的に診療応援を行っている。このように、当教室では地域の基幹病院に神経内科を開設してきたが、いずれも地域においては神経疾患医療の中核を担い、卒後教育病院として北大病院と連携しながら後継者教育の一翼も担って機能し続けている。

ここで専門医の育成について触れておきたい。日本神経学会では神経内科専門医の認定を行っている。1973 年より北大で神経内科診療の開始以来、ほぼ毎年にとり新規に入局者が加わってきた。北大病院で始まった 2 年間の内科初期研修以後は卒後三年目の入局となっている。表に示した数字は、後期研修医(卒後三年目以降)の神経内科研修生の推移である(表)。初期研修医はこの中には含まれていない。平成 21 年 8 月現在までに累計で 124 名が北大神経内科で学んだ。そのなかには内科、脳神経外科、整形外科からの研修生が若干名含まれている。残は神経内科を専攻し、その殆どが専門医資格を修得して道内外で教育、診療、研究の最前線で活躍している。

最後に神経内科の研究について触れておきたい。神経内科の診療とする疾患は脳・脊髄、末梢神経、骨格筋を中心とする機能的・器質的疾患である。この中には発達から老化まで、多彩な疾患が含まれている。その中から北大神経内科では、北国に多い多発性硬化症、難治性神経疾患としては筋萎縮性側索硬化症、パーキンソン病、脊髄小脳変性症の四疾患に重点的に取り組み、臨床のみならず様々な基礎的研究技法を取入れて、内外にその成果を発信してきた。この領域では、日本における指導的研究者もしくは臨床医が教室から育て、活躍している。田代邦雄前教授は、厚生省特定疾患神経変性疾患調査研究班の班長を二期 6 年、務められた。筋・末梢神経疾患に関しては、4 研時代から継続して生検組織の免疫組織化学診断を行い、道内の筋疾患診療を支えきた。最近では、IT 環境の整備により関連病院と定期的に Net カンファレンスを行うことにより、筋疾患の診療水準の維持と卒後教育に務めている。

神経内科の黎明期と設立の経緯、その後の発展の詳細に着いては、筆者の記憶の曖昧な部分は教室の業績集や同門会関係の冊子を参考にした。主な資料を以下に列記したので参照して頂きたい。また不明な点は、田代名誉教授と森若同門会会長(前助教授)の両氏に確認して補筆いただいた。神経内科の現在の活動状況については、神経内科ホームページに掲載しているので、合わせてご参照頂ければ幸いである。

(佐々木秀直)

(注: この本文は写真付きで医学部創設 90 周年記念事業刊行物に掲載されています)

参考資料

1. 北海道大学医学部脳神経外科 神経内科部門のあゆみ、脳神経外科神経内科部門 昭和 60 年 10 月 刊行.
2. 北海道大学神経内科 開設までの歩み 1973-1983、医学部附属病院神経内科 昭和 63 年 3 月刊行.
3. 北大脳神経外科 同門会会誌 第 4 号、北大脳神経外科同門会 昭和 63 年 7 月刊行.
4. 北海道大学医学部附属病院 神経内科 開設 5 周年記念誌、医学部附属病院神経内科 1993 年 5 月刊行.
5. 北海道大学神経内科のあゆみ—その誕生から診療科、講座そして大学院研究科まで、神経内科学分野 1999 年 12 月刊行.
6. 田代邦雄教授 退官記念業績集 1973-2002、神経内科学分野 2003 年 3 月刊行.
7. 北海道大学神経内科創設 20 周年記念誌、20 周年記念誌編集委員会 平成 20 年 3 月刊行.
8. 北大神経内科ホームページ <http://neurology.med.hokudai.ac.jp/~neuro-w/>

表. 神経内科の研修者数

